

書写の要素 字形：点画の組み立て方(方向) ③

山梨大学教授 宮澤 正明
みやざわ まさあき



されて書かれます。したがって、上の左払いの送筆部分は短くなり、終筆方向は漸次左下に向かいます。

上下に並ぶ左払いの書字リズム：回転小から回転大へ

これまで、点画の中で、左払いは特に多種多様であることを紹介してきました。左払いは「千・川・大・月」のように単独で書かれる場合もあれば、「行・友・形」のように二つ、三つと重ねて書かれる場合もあります。前者の場合、左払いに対応する画によってその方向が規定されますが、後者の場合も、ある種の法則が働いて、それぞれの払いの方向を規定しているようです。

今回は、左払いが二つ以上重なった場合における、相互の方向の関係を説明します。

○左払い相互の方向

・上下に並ぶ左払いの場合

「行・衆・夕・多・久・冬・形・参」などの漢字のように、二つ以上の左払いが連続して書かれて上下に重なる場合は、平行に書くのではなく、下の図のように、小さい回転から大きな回転へと運動する書字リズムに支配



「犯・象・家」のように、先に書かれる左払いと後に書かれる左払いとの間には他の画（反り）が入り、左払いが不連続に書かれる場合でも、小さい回転から大きな回転運動のリズムは解消されずに、上の左払いの送筆部分は短くなり、終筆方向は漸次左下に向かいます。



なお、「イ・丞」の最初の左払いの後に続く画（反り）も、回転の書字リズムとは無縁ではなく、一連の運動に支配されて曲線的に書かれているものと考えられます。

「物・易・場・陽」に含まれる「勿」形の左払いは横並びのようですが、楷書に先行する書体の隸書では、上下に並ぶ左払いでした。そのなごりでしょうか、楷書でも右に示した「イ・丞」形などと同様に小→大への回転運動になります。



・左右に並ぶ左払いの場合

「友・反」などに見られる先に書かれる左払いと「又」の左払い、「麦・夏」などの下部に位置する「夕」の二つの左払いは、いずれも横に並べると安定し、整った字形になりやすいようです。この場合、やはり、回転の書字リズムが生じ、先に書かれる左払いは大きな回転運動で、後に続く左払いの部分は小さめの回転運動になります。

左右に並ぶ左払いの書字リズム：回転大から回転小へ



なお、重複する左払いが適切に書かれた場合、それぞれを延長すると一点に集中します。左払いが放射状に放たれた線分とみなすと上下に位置する左払いは漸増する線であり、左右に位置する左払いは漸減する線であるといえます。



左払い相互の関係を見ると、整った字形を実現するには、点画の筆使いや点画相互の関係から生じる書字リズムが関与していることがわかります。字形指導において、例えば「行」の左払いが平行に書かれていた場合、「左払いの方向が違ふ」と指摘するのではなく、回転の書字リズムの原理を説くことが適切な助言となるのではないのでしょうか。書く過程を重視した書写でありたいものです。